

4. 鳥類調査結果

4. 鳥類調査

4.1 鳥類調査結果の概要

河川水辺の国勢調査の鳥類調査は、平成2年から17年までの1～3巡目調査では、間隔をあけて設定された複数の調査地区を観察するという定点調査法によって実施されてきましたが、平成18年度以降の4巡目調査から調査マニュアルが改訂され、河口から上流にいたる全調査区間を1kmピッチで連続的に観察するというスポット調査法で実施されるようになりました。これによって、河口から上流にいたるまでの鳥類相を連続的に把握できるようになりました。

(1) 確認種

今回とりまとめを行った12水系14河川で確認された鳥類は、18目52科235種でした。確認種数の多かった河川は、北海道地方の天塩川の148種、北陸地方の信濃川の144種、九州地方の球磨川の126種、中部地方の木曾川の116種などでした。

(2) 重要種

今回とりまとめを行った14河川で確認された重要種は、環境省のレッドリストで絶滅危惧ⅠA類に指定されているクロツラヘラサギ、チゴモズ、絶滅危惧ⅠB類に指定されているヒメウ、ツクシガモ、オジロワシ、クマタカ、イヌワシ、チュウヒ、ブッポウソウ、ヤイロチョウなど37種でした。重要種の確認された種数が多かった河川は、九州地方の球磨川の19種、北海道地方の天塩川の18種、北陸地方の信濃川の17種などでした。

(注) 重要種について

本資料においては、次の文献のいずれかに該当する種、亜種を重要種としました。

- 「文化財保護法」の特別天然記念物および天然記念物
- 「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律」の国内希少野生動植物種及び緊急指定種
- 環境省 編「レッドデータブックに揚げるべき日本の絶滅のおそれのある野生動物の種のリスト」掲載種（2006：鳥類、両生類、爬虫類、その他無脊椎動物、2007：汽水・淡水魚類、貝類、維管束植物、哺乳類、昆虫類）

絶滅危惧ⅠA類：ごく近い将来における絶滅の危険性が極めて高い種。

絶滅危惧ⅠB類：ⅠA類ほどではないが、近い将来における絶滅の危険性が高い種。

(注：底生動物、陸上昆虫類等ではⅠA類とⅠB類を併せて「絶滅危惧Ⅰ類：絶滅の危機に瀕している種」としている。)

(3) 国外外来種

1) 国外外来種の確認状況

今回とりまとめを行った14河川で確認された国外外来種は、シナガチョウ、コクチョウ、アヒル、コジュケイ、ドバト、ガビチョウ、ソウシチョウの7種でした。このうち、ドバトは東北地方の米代川を除くすべての河川で確認されました。

2) 特定外来生物の確認状況

上記の国外外来種のうち、外来生物法が定めるところの特定外来生物は、ガビチョウ、ソウシチョウの2種でした。

(注) 国外外来種の選定基準について

注1) 国外外来種とは、外来種のうち日本国外を起源とする種であり、おおむね明治以降に、日本国外

より導入された種(亜種、またはそれ以下の分類群についてもこれに準じる)を対象としています。

なお、外来種とは、本来その生物が生息していない地域に貿易や人の移動などを介して意図的・非意図的に導入された種をいいます。外来種のうち、日本国外から持ち込まれた種を「国外外来種」といい、日本国内の種であっても本来その生物が生息していない地域に、他の場所から持ち込まれた種は「国内外来種」といいます。

本資料でいう国外外来種とは、おおよそ明治以降に人為的影響により導入したと考えられる国外由来の動植物すべてを指し、導入以後に国内に定着した種であるか否かの判断は、選定の際に考慮していません。また、外来種の選定は、8～9 ページに掲載した文献および10 ページに掲載した学識者による意見をもとに行っています。

- 注2) 特定外来生物とは、『特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律(2005年6月1日施行)』により、輸入や飼養等が規制される生物(生きているものに限られ、個体だけではなく、卵、種子、器官なども含まれる)です。おおむね明治以降に国外から導入された国外外来種のうち、生態系、人の生命・身体及び農林水産業へ被害を及ぼすもの、または及ぼすおそれがある生物が指定されています。
- 注3) 要注意外来生物とは、「外来生物法の規制が課されるものではないが、生態系に悪影響を及ぼしうることから、利用に関わる個人や事業者等に対し、適切な取扱いについて理解と協力について啓発を行う」必要がある生物として環境省が選定した外来生物です。